

自分の生活や人生と関わらせて

二年の国語の授業をのぞきました。「字のないはがき」の授業でした。この作品は随筆ですので、書かれていることは事実です。多かれ少なかれフィクションが含まれている小説とは違って、全てが実際にあったことばかりです。一年の皆さんは来年度学習しますので、楽しみにしててくださいね。

筆者向田邦子さんの父親は、ひとことと言うと「暴君」でした。家族に日常的に暴言を吐いたり暴力をふるったりする父親。自分は履物を脱ぎ散らかすのに、子どもたちには「そろそろ」と命令する父親。自分が勤める会社の手帳を有無を言わせず子どもたちに使わせる父親。家族より一品多い夕食を、高足膳（現代風に言えば、一人一人のテーブルかな）で準備させる父親。優しさや思いやりが全くないように思えるのが向田さんの父親でした。

こんな男性があなたの身近にいたら、今のあなただったらどうですか。現代なら虐待とかDVとか言われてしまう現実が、あなたの周りにあふれていたら……。

当然のことながら、当時の向田さんは父親のことが大嫌いでした。到底理解できない人物だと考えていました。向田さんは我慢に我慢を重ね、三十九歳の時、ささいなことで父親とけんかをして家を出ました。その後、父親が急性心不全でこの世を去ったのですが涙は出なかったと言います。

そんな向田さんが、「字のないはがき」を書いたのが四十七歳の時です。彼女は五十一歳の時に飛行機事故で亡くなっていますので、遺書として書いたと言ってもいいかもしれません。その時の向田さんは天国の父親をどう思っていたのでしょうか。

その手掛かりは、「字のないはがき」の文章の中にあります。向田さんはしっかりとそれを書き残しています。父親に対する恨みつらみでこの作品が終わっていたら、教科書には載っていないことでしょう。恨みつらみではないどんな気もちがこの作品に表現されているのか、二、三年の皆さんはわかりますよね。疎開先から妹が帰ってきたときの部分が全てです。それが、向田さんにとって「最も心に残るもの」だったのです。

私自身がとっても好きな作品ですので、今日はいつも以上力を入れて書いてしまいました。国語の勉強というより、自分の生活や人生と関わらせて読んでほしいと強く願っています。特に、自分中心に物事を考えがちな年ごろの今、最も身近にいる家族がどんな思いでいるかを、向田さんの作品から知ってほしいと思います。

向田さんには「お辞儀」という随筆もあります。生徒の皆さんよりお父さんお母さんの世代に読んでいただきたい作品です。皆さんにはちよつとわからないかもね。家族の話題にしていただければ幸いです。

（十月二十七日 記）

